

裏をなすものであれば、退屈と感じようと息苦しくことじとく排除したりするのであれば、現代詩にかぎらず文化などまるで成り立ちようもなくなってしまうだろう。自由闊達と奢侈駭蕩は文化醸成の表と裏をなすものである。

せいを棚に上げさせてもらえば、端的に言つて、論者たる議論がではないが、雑誌で目にする論考や対談・座談等十のうち七、八くらいの割で、退屈だ、あるいは息苦しいと思う。だいたい自分の書くものや関わったものなら、数少ないその殆どすべてについて、やはり省みてそう思う。どうしてなのか。おそらく今私たちにおいては、人生という物語の時間も身体としての関係のありかたも殆ど毀れかかってい

て、自分が誰なのか、どこにいるのか、何をしたいのか、見当識を失いかけているにもかかわらず、詩をめぐる批評意識はそれを、ただ新しい未知の事態として知的に対象化しようとするのに急で、かえつてその危機感を逆に遠ざけようとしているのではないかと見うるものなのであって、そういうたび遠ざかることじとく排除したりするのであれば、現代詩にかぎらず文化などまるで成り立ちようもなくなってしまうだろう。自由闊達と奢侈駭蕩は文化醸成の表と裏をなすものである。

『現代詩手帖』昨年十二月号の「詩と歴史の切り結ぶ場所で」と題されたシンポジウム(野村喜和夫+城戸朱理+守中高明+永原孝道+野沢啓)での発言である。これは私にとって、スピルバーグの映画と同じ

「人間とは何か」に最終解答をもたらすゲノム解読!!

## ゲノムが語る 23の物語

マット・リドレー  
中村桂子、齊藤隆央訳

人のDNA情報、ゲノムの解読り、人類の太古の歴史の謎を秘める人の驚異ゲノムのメッセージとは? その染色体数にあわせた23の物語。  
◆2400円

### ゲノムを読む

人間を知るために  
松原謙一、中村佳子  
ヒトゲノムプロジェクト立ち上げ時のリーダーが語る、その全体像、将来の行方。◆1800円

### 紀伊國屋書店

出版部: 東京都渋谷区東3-13-11  
営業tel: 03(5469)598 表示価は税別  
http://www.kinokuniya.co.jp

VOYAGER  
T-Time 2.0  
Windows&Macintosh CD-ROM  
ISBN4-89476-2021  
東京大学社会情報研究所・小野秀雄監修  
かわら版約600点、新聞錦絵約300点をデータベース化  
ニースの誕生 監修 北原糸子・佐藤健一  
Windows&Macintosh CD-ROM ●四〇〇円+税  
ISBN4-88752-0174

土方 錄著 俳句と病との闘いに生き抜いた現代俳句の巨星・石田波郷。その生と死を事実と虚構をもつて織りあげた伊予絹のじとく小説『重信川河口』「病む生なりき」「波郷百句」を収録。  
小説 石田波郷 ISBN4-7592-5028-X  
T-Time 機能限定版は  
http://www.voyager.co.jp/T-Time/  
ボイジャー  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-41-14  
tel: 03-5467-7070 fax: 03-5467-7080

より詳しい内容、T-Time機能限定版は  
http://www.voyager.co.jp/T-Time/  
ボイジャー  
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-41-14  
TEL: 06-6561-5273 FAX: 06-6568-7166  
東京都千代田区神保町1-9  
TEL: 03-3291-7586 FAX: 03-3293-1706  
http://www.blp.co.jp

### 現代詩

# 詩をめぐる」とばの現在

高橋秀明  
詩をめぐることばの現在

思想・文化情況の〈現在形〉を射抜く  
批判的視座を求めて

# La Vue ラ・ビュー

No.5 (2001/03/01号)

発行人: 山本繁樹

発行所: るな工房 黒猫房 窓月書房  
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022  
TEL/FAX 06-6320-6426  
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html  
E-mail: YIJO0302@nifty.ne.jp

### 目次

- ◆詩をめぐることばの現在 ..... 高橋秀明
- ◆紫の上のいのり ..... ゆふまどひ あかね 中塚則男
- ◆魂脳論序説 ..... 平野 真
- ◆複製藝術論のアクチュアリティ ..... 鵜飼雅則
- ◆日本一あぶない音楽 —— 河内音頭断片 ..... 加藤正太郎
- ◆私はその存在を肯定したい —— 立岩真也著『私の所有論』『弱くある自由へ』を読む ..... 加藤正太郎
- ◆編集後記

No.6は2001/06/01発行予定です。

■無断転載を禁じます ■

【叢書=倫理学のフロンティア】

**所有のエチカ** ▼二刷  
大庭健・鷺田清編 「私のもの」となぜ言えるのか?  
思想史的・概念分析的捉え直す。  
西成区山王町にあった「てんのじ村」。70年代後半の村や舞台、恋の万葉歌で訪ねる北摂・大阪・河内・和泉のロマン。歌の解説、樂屋、旅の様子等をモノクロ89葉で紹介する。1600円+税  
コースガイド、地図、写真で構成付。地名索引。1500円+税  
私は思っています。」と  
たとえば城戸はこう言つている。

「なぜ悪いことをしてはいけないのか」 Why be moral?  
▼三刷  
大庭健・鷺田清編 「私のもの」となぜ言えるのか?  
思想史的・概念分析的捉え直す。  
西成区山王町にあった「てんのじ村」。70年代後半の村や舞台、恋の万葉歌で訪ねる北摂・大阪・河内・和泉のロマン。歌の解説、樂屋、旅の様子等をモノクロ89葉で紹介する。1600円+税  
コースガイド、地図、写真で構成付。地名索引。1500円+税  
私は思っています。」と  
たとえば城戸はこう言つている。

「なぜ悪いことをしてはいけないのか」 Why be moral?  
▼三刷  
大庭健・鷺田清編 「私のもの」となぜ言えるのか?  
思想史的・概念分析的捉え直す。  
西成区山王町にあった「てんのじ村」。70年代後半の村や舞台、恋の万葉歌で訪ねる北摂・大阪・河内・和泉のロマン。歌の解説、樂屋、旅の様子等をモノクロ89葉で紹介する。1600円+税  
コースガイド、地図、写真で構成付。地名索引。1500円+税  
私は思っています。」と  
たとえば城戸はこう言つている。

「なぜ悪いことをしてはいけないのか」 Why be moral?  
▼三刷  
大庭健・鷺田清編 「私のもの」となぜ言えるのか?  
思想史的・概念分析的捉え直す。  
西成区山王町にあった「てんのじ村」。70年代後半の村や舞台、恋の万葉歌で訪ねる北摂・大阪・河内・和泉のロマン。歌の解説、樂屋、旅の様子等をモノクロ89葉で紹介する。1600円+税  
コースガイド、地図、写真で構成付。地名索引。1500円+税  
私は思っています。」と  
たとえば城戸はこう言つている。

「なぜ悪いことをしてはいけないのか」 Why be moral?  
▼三刷  
大庭健・鷺田清編 「私のもの」となぜ言えるのか?  
思想史的・概念分析的捉え直す。  
西成区山王町にあった「てんのじ村」。70年代後半の村や舞台、恋の万葉歌で訪ねる北摂・大阪・河内・和泉のロマン。歌の解説、樂屋、旅の様子等をモノクロ89葉で紹介する。1600円+税  
コースガイド、地図、写真で構成付。地名索引。1500円+税  
私は思っています。」と  
たとえば城戸はこう言つている。

「なぜ悪いことをしてはいけないのか」 Why be moral?  
▼三刷  
大庭健・鷺田清編 「私のもの」となぜ言えるのか?  
思想史的・概念分析的捉え直す。  
西成区山王町にあった「てんのじ村」。70年代後半の村や舞台、恋の万葉歌で訪ねる北摂・大阪・河内・和泉のロマン。歌の解説、樂屋、旅の様子等をモノクロ89葉で紹介する。1600円+税  
コースガイド、地図、写真で構成付。地名索引。1500円+税  
私は思っています。」と  
たとえば城戸はこう言つている。







# 複製芸術論のアクトユアリティ

平野 真

ヴァルター・ベンヤミン（一八九二—一九四〇）は、ユダヤ系の批評家であつて、カント、ロマン派を研究することからはじめ、ジャーナリズムにおいて、現代文学、写真、都市などに関する幅広い批評活動を行い、デリダ、ラクー＝ラバルトなどの哲学者たちにも大きな影響を与えた。ベンヤミンの批評活動のクリティカル・ポイントを一言で言えば、十九世紀からはじまる「西欧の近代」における経験の変容とその経験を構成する空間の問題である。今回は、三六年に発表され、最もよく読まれてきたテクストの一つである「複製技術時代の芸術作品」の現在性について考えてみよう。

ベンヤミンが「複製技術の時代の芸術作品」において示した方向性は、現代の芸術の課題でもあり、それは、現代も「未完のプロジェクト」として遂行されつつあるものである。現代の芸術が志向する「空間」性という課題は、ベンヤミンにおいて「遊戯空間」として語られるところになるのだが、「遊戯空間」を考える際して、中心をなすのは、複製芸術としての映画である。

このベンヤミンの指摘は、先駆的なものであつて、現代の芸術的視点から見てもいまなお重要なものである。現代的な観点から見るならば、音楽、絵画、映画などの芸術において生じていることは、「空間」性の問題であるといふことができるからである。例えれば、ドビュッシー、ストラヴィンスキーの作品に潜在的に表現されているものや、戦後のブーレーズ、シユトックハウゼン、クセナキスから武満徹にいたる作曲家の音楽作品は、ドイツ・ウェイーン音楽の伝統に沿つた時間のなかで主題（主体）がドラマティックに展開するベートーヴェンに代表されるような音楽ではすでに

ベンヤミンは、人間の技術を第一の技術と第二の技術に区別して用いており、芸術を第一の技術からなる芸術と第二の技術からなる芸術という区別において思考する必要性を説いている。第一の技術とは、自然を支配し、人間を動員する技術であつて、それは、集団の統治と制度の維持のためになされる技術である。そこでは、芸術は、礼拝的価値を与えられ政治にアーラを付与するものとなつていて、「第一の技術」的觀點から使用された芸術は、大衆を動員し、政治を美化する役割を担う。現代のハリウッドのスター・システムは、ベンヤミンもすでに批判していたように、映画が抹消するはずのアーラを再獲得し、大衆を動員する技術となつていて。そこでは、スターの神話が作り出され、神秘のアーラが付与される。それは、大型資本と結びついた技術となり、大衆を動員するが、そこでは、民衆の自己表現は与えられない。もちろん、ベンヤミンが考える映画はそういうものではない。

作業場の光景（回転する旋盤、穫り入れをするクリー、運輸労働）と都会の享楽場面（バー、ゲリル、クラブ）を交互にうつし出す。社交界をあつかつた近年の映画から、ばらばらにした断片（それらはおむね、愛撫している手とか、ダンスをしている脚とか、ドレスの縁飾りやカラーリングなどのディテールである）をとりだし、それらがたえず、プロレタリアの労働場面の間にわり込んでくるように、モンタージュしたのである。（「ロシア映画芸術の現状」）

作業場の光景（回転する旋盤、穫り入れをするクリー、運輸労働）と都会の享楽場面（バー、ゲリル、クラブ）を交互にうつし出す。社交界をあつかつた近年の映画から、ばらばらにした断片（それらはおむね、愛撫している手とか、ダンスをしている脚とか、ドレスの縁飾りやカラーリングなどのディテールである）をとりだし、それらがたえず、プロレタリアの労働場面の間にわり込んでくるように、モンタージュしたのである。（「ロシア映画芸術の現状」）

作業場の光景（回転する旋盤、穫り入れをするクリー、運輸労働）と都会の享楽場面（バー、ゲリル、クラブ）を交互にうつし出す。社交界をあつかつた近年の映画から、ばらばらにした断片（それらはおむね、愛撫している手とか、ダンスをしている脚とか、ドレスの縁飾りやカラーリングなどのディテールである）をとりだし、それらがたえず、プロレタリアの労働場面の間にわり込んでくるように、モンタージュしたのである。（「ロシア映画芸術の現状」）

複製芸術としてのカメラを使用することで、民衆は、すでに、自分で、自分の映像を容易に持つことができる。労働者は、その映像について互いに議論し、それによって自己の状況、すなわち、労働力がおかれている社会的コンテクストを反省することができる。彼らは、自己の状況を判断する力を自己表現して、獲得する。その際に、重要なことは、高度に専門化し、断片化した「労働」の現場に、カメラが向けられるということである。

カメラは、労働の断片化した姿を映像として切り取る。そして、その映像は、分析され、モントージュされる。後にゴダールが影響を受けることになるジガ・ヴエルトフの映画についてベニヤミンは以下のことを指摘している。

映画は、戦後のイタリアのネオリアリズモに触発されたヌーヴェル・バーグ以後の作品において、物語を中心において映画的な時間を統制する作品から、時間のなかで、広がる断片的な映像からなる空間的な「出来事」を表現する作品へと転換を果たすのである。特定の物語を連続的に語る芸術ではなく、断片的な映像をモンタージュして、空間において構成された出来事を表現する芸術への転換が、ゴダールを代表とする作品には見られるだろう。

ベンヤミンは、人間の技術を第一の技術と第二の技術に区別して用いており、芸術を第一の技術からなる芸術と第二の技術からなる芸術という区別において思考する必要性を説いている。第一の技術とは、自然を支配し、人間を動員する技術であつて、それは、集団の統治と制度の維持のためになされる技術である。そこでは、芸術は、礼拝的価値を与えられ政治にアーラを付与するものとなつていて、「第一の技術」的觀點から使用された芸術は、大衆を動員し、政治を美化する役割を担う。現代のハリウッドのスター・システムは、ベンヤミンもすでに批判していたように、映画が抹消するはずのアーラを再獲得し、大衆を動員する技術となつていて。そこでは、スターの神話が作り出され、神秘のアーラが付与される。それは、大型資本と結びついた技術となり、大衆を動員するが、そこでは、民衆の自己表現は与えられない。もちろん、ベンヤミンが考える映画はそういうものではない。

政治を美的に演出し、政治を美化することには、なにもファシズムの時代だけではなく、現代の日本においても見られることである。例えば、昨年行われた沖縄サミットにおいては、故小渕総理の依頼として、小室哲也作曲の歌を安室奈美恵が歌つた。そして、元X-JapanのYOSHIKIが、「天皇陛下即位十年をお祝いする国民祭典」において、自身が作曲した「奉祝曲」を演奏した。こうしたことを見ると、できない。まさに、ベンヤミンが、複製芸術論で抵抗しようとしたのは、このように政治が、

複製芸術としてのカメラを使用することで、民衆は、すでに、自分で、自分の映像を容易に持つことができる。労働者は、その映像について互いに議論し、それによって自己の状況、すなわち、労働力がおかれている社会的コンテクストを反省することができる。彼らは、自己の状況を判断する力を自己表現して、獲得する。その際に、重要なことは、高度に専門化し、断片化した「労働」の現場に、カメラが向けられるということである。

カメラは、労働の断片化した姿を映像として切り取る。そして、その映像は、分析され、モントージュされる。後にゴダールが影響を受けることになるジガ・ヴエルトフの映画についてベニヤミンは以下のことを指摘している。

現代的な都市において生活するものは、マンショニ生

活において象徴的に言われるよう、すでに、それに、単純化された労働の意味が転換はじめおり、それは、「遊び」と類縁関係を持ち始めているのである。

複製芸術としてのカメラを使用し、断片化する。すなわち、個人は、すでに、連続した時間性のなかで、事態を経験するのではなくっている。彼は、断片的にしか、出来事を経験することが出来ない。彼は都市で生じていることを「部分」としてしか知りえない。ヴェルトフの映画の手法は、そうした都市経験が作り出す「経験の変容」に即したものとなつてゐる。その手法の重要な点は、断片化された時間のなかで、広がる断片的な映像からなる空間的な「出来事」を表現する作品へと転換を果たすのである。特定の物語を連続的に語る芸術ではなく、断片的な映像をモンタージュして、空間において構成された出来事を表現する芸術への転換が、ゴダールを代表とする作品には見られるだろう。

ベンヤミンは、人間の技術を第一の技術と第二の技術に区別して用いており、芸術を第一の技術からなる芸術と第二の技術からなる芸術という区別において思考する必要性を説いている。第一の技術とは、自然を支配し、人間を動員する技術であつて、それは、集団の統治と制度の維持のためになされる技術である。そこでは、芸術は、礼拝的価値を与えられ政治にアーラを付与するものとなつていて、「第一の技術」的觀點から使用された芸術は、大衆を動員し、政治を美化する役割を担う。現代のハリ

ウッドのスター・システムは、ベンヤミンもすでに批判していたように、映画が抹消するはずのアーラを再獲得し、大衆を動員する技術となつていて。そこでは、スターの神話が作り出され、神秘のアーラが付与される。それは、大型資本と結びついた技術となり、大衆を動員するが、そこでは、民衆の自己表現は与えられない。もちろん、ベンヤミンが考える映画はそういうものではない。

作業場の光景（回転する旋盤、穫り入れをするクリー、運輸労働）と都会の享楽場面（バー、ゲリル、クラブ）を交互にうつし出す。社交界をあつかつた近年の映画から、ばらばらにした断片（それらはおむね、愛撫している手とか、ダンスをしている脚とか、ドレスの縁飾りやカラーリングなどのディテールである）をとりだし、それらがたえず、プロレタリアの労働場面の間にわり込んでくるように、モンタージュしたのである。（「ロシア映画芸術の現状」）

# 日本一あぶない音楽

## 河内音頭断片

鶴飼雅則

山：「なかにひときわ悠然と」  
いつ頃からだろか、通勤時、自宅の玄関を出てすぐ眼に入る山並にはほんの少し目を遣つてから駅に向うのが、私のならいとなつていてる。私の住む大阪の河内と奈良の境を南北に画するそれらの山々は、この夏も何度も櫻で聞いた河内音頭のマクラの中で次のように歌われている。

ば、遠景に生駒連山の山並が見えている、そのこと 자체が、私たち河内に住む者にある種のやさしさを与えてくれているように思うのだ。それは、いわば心の拠りどころとも言うべき河内の原風景なのである。

秋風や山の見ゆるをやすらぎに 雅則

■「丸」考…浅丸、光丸、小石丸、菊水丸 G様

昨日はありがとうございました。  
久しぶりにお会いし、大変楽しかったです。

お借りした鉄砲光三郎のカセットは、「民謡鉄砲節 第2集」として出された（一九六〇年代前半）LPをカセット化したもので、全盛時の光三郎の音頭を楽しめます。独特的の弾むような歌声は、当時の人々を熱狂させたのでしょうか。

さて、音頭取り達の名前にどうして「丸」が多いのかという問題ですが、河内音頭について最も包括的に論じた村井市郎さんの書物『八尾の音頭』（八尾市）を見ても、特にふれられていません。

いうまでもなく、「丸」は、「若」、「千代」、王などと同じく「童名（わらわな）」（幼名）ですから、昨日、Gさんがおつしやったように幼年時に弟子入りした音頭取り（菊水丸は八歳

卓見だと思う。そして、私自身に即して言え

このように、やや強迫的に山の名前を並べる音頭の定型フレーズについて、「オンドロジスト」（河内音頭研究家）のひとり、朝倉喬司は書いている。

音頭取りの心意の深みにおいて、山々の名は歌われていると、うよりもむしろ、唱えられているのである、山の呪力を満身にのりうつせし、カラダを歌の動力源と化していくプロセスの一端をなしているはずなのだ。

（河内、湖水の幻影）、『走れ国定忠治』所収、現代書館）

卓見だと思う。そして、私自身に即して言え

このように、やや強迫的に山の名前を並べる音頭の定型フレーズについて、「オンドロジスト」（河内音頭研究家）のひとり、朝倉喬司は書いている。

音頭取りの心意の深みにおいて、山々の名は歌われていると、うよりもむしろ、唱えられているのである、山の呪力を満身にのりうつせし、カラダを歌の動力源と化していくプロセスの一端をなしているはずなのだ。

（河内、湖水の幻影）、『走れ国定忠治』所収、現代書館）

卓見だと思う。そして、私自身に即して言え

童とは 身の相撲取りがなぜ「武藏丸」という四股名を名乗るのか？ 一人前の河内男の音頭取りがなぜ「浅丸」を名乗るのか？ 卓越した中世史家である網野善彦さんはその書『中世の非人と遊女』（明石書店）の中で、中世の非人であった「放免」や「囚守」達が、「童名」である「丸」を名乗っていたことを指摘した後、次のように書いています。

童そのものの中に、人の力の及ばぬものを見た当時の社会の見方を背景に、こうした童名を名乗る童形の成人も、また神仏の世界につながる特異な呪的能力を持つ人と見られていたのではないかと、私は考える。

さらに、網野さんは、私達が良く知っている船の名だけではなく、鷹や犬のような動物、刀剣や鎧甲などの武具、笛、笙、などの楽器が、しばしば「丸」を付した名前を持つていたこと、そこには「童、さらに童名の持つ呪性」が深く関わっていたことを指摘しています。

「丸」という名前には、「異形の者」達がもう「力」が宿っていると考えられていたのでしょうか。興味深いのは、樂器に童名が付されていたことに關しての、次の記述です。

これらも音そのものが神仮の世界と俗界を媒介する役割を果たすと考えられていたことと関係がある。

元来が 仏供養の音曲（おんぎょく）

が、「神仮の世界につながる」名である童名「丸」を名乗るのは、このあたりに歴史的な背景があるのかもしれませんね。

■講座ご案内■  
大学・行政講座で実績のある  
コミュニケーション支援プログラム  
**アサーティブ**  
**トレーニング**

トランナーとのロールプレイを通して自分にあった言葉を探し、相手に伝える練習をしながら、あなたの自己表現のスタイルを作ります。

アサーティブとは、自分の権利を相手に尊重して貢い、同時に相手の権利も尊重する。つまり対等な関係のコミュニケーション実現のことです。

■講座は、グループでも個人でも承ります。  
■各大学の経験豊かなカウンセラー（男女）の派遣もいたします。  
■お問い合わせ・お申し込みは、下記までお願いします。

**内田事務所**  
図書出版 アリーフ一葉舎  
情報発信 GenderfreePress

〒606-8203 京都市左京区田中関町26  
TEL:075-705-0088 FAX:075-705-0080  
aleaf@skyblue.ocn.ne.jp

のとき、父河内屋菊水に弟子入りしています）の名に「丸」が付けられたというは一応理解できます。（「丸」には、「一人前の人間とみなされていないものに対する蔑称」という意味合があります。（あるからです。また音頭の口上の定型フレーズである「お見かけどおりの若輩で」と同じように、一応自分を卑下して見せるという心性合です）と、元服（成人）すると、実名、字といつた大人の名前に變っています。音頭取りの場合、ベテランになつて名前から「丸」をとるとか、改名するというようなことはないようですから、問題のポイントは、「丸」を付した名前の歴史的意味にありそうです。

がそこにあるとも考えられます）けれども、日本の中世期からあつた童名の場合は、と元服（成人）する、実名、字といつた大人の名前に變っています。音頭取りの場合、ベテランになつて名前から「丸」をとるとか、改名するというようなことはないようですから、問題のポイントは、「丸」を付した名前の歴史的意味にありそうです。

■日本一あぶない音楽：三音屋浅丸と座頭市 天童よしみの「天童節 新河内音頭」（抜群にうまい！）と一緒に渡したいと考えていました。まだお会いするのを楽しみにしております。浅丸「悪名」 幸枝若「森の石松」 薬師の梅吉

■日本一あぶない音楽：三音屋浅丸と座頭市 周辺 私がなぜ河内音頭に惹かれるようになったかと言えば、もちろん八尾に住んでいるということもあります。以前からずっとアメリカの黒人音楽であるソウルやブルースが好きだったと、いうことが大きいと思います。

■日本一あぶない音楽：三音屋浅丸と座頭市 音楽雑誌「ニューミュージック・マガジン」周辺のソウルフリーライク達の間では、随分以前から日本のリズム・アンド・ブルースとして河内音頭が熱く論じられていました。（註）

その代表的な論文が、朝倉喬司の「大阪の闇をゆさぶる河内音頭のリズム」（ニューミュージック・マガジン、78年10月号）だつたのです。が、この夏、これを巻頭に収録した朝倉の本、『芸能の始原に向つて』（朝倉喬司、ミュージック・マガジン、78年10月号）だつたのです。J·I·C·C出版局（現・宝島社）を読み、私も河内音頭に目覚めたのでした。

とにかく、これを巻頭に収録した朝倉の本、『河内音頭の世界』（全関東河内音頭振興隊篇、Mで、鉄砲光三郎の民謡河内音頭（鉄砲節）の一節（きつちり、実際、まことに、見事に読めなけれど、八千八声のほとぎす……）を聴いたことぐらいしかありませんでしたから、私がまず聴いてみたいと思ったのは、四十二歳で夭折した天才音頭取り（伝説の浅丸）こと、三音屋浅丸でした。彼は河内松原出身の音頭取りでしたが、朝倉は、追悼文（三音屋浅丸の死によせて）の中で、彼についてこう書いていました。

氣合一本の、思い切りのいい歌いつぶりが彼の身上だった。（中略）大仰な身振りの全くない、芸を自分でかかえこむことを絶対にしない人だった。（中略）夏になれば、若い衆とライバニにのりこんで河内の盆踊り場をかけめぐり、いつも全力投球で、

### ■河内野の小さな文化発信基地■

- 食 事…手作りにこだわった料理を吟味された器で
- スペース…アットホームで落ち着いた空間を演出 松本民芸家具のテーブルと椅子
- 音 楽…ジャズ、ソウル、ブルース、ロック、民族音楽、 フォークなど2000枚を超えるCDによるBGM
- イベント…ライブ：大塚まさじ、高田渡、三上寛、加川良 演奏：松野迅 一人芝居：新屋英子
- 販 売…アジア各地の衣料、アクセサリー、雑貨

たんぽぼ

南海線金剛駅から高辻台2丁バス停すぐ  
富田林市高辻台2丁目30-20 Tel/Fax:0721-28-1593  
営業時間：午前9時～午後8時 定休日：毎週火曜

映画「座頭市」全作を縦横無尽に論じた快作ですが、この本によって映画「座頭市」の原作者が子母澤寛の「座頭市物語」であることを知りました。

これは子母澤寛の隨筆集『ふところ手帳』の中に収録されています。それで早速、古書店を廻り手に入れました。

『ふところ手帳』(子母澤寛、中央公論社)

この本の中にある「座頭市物語」はわずか十頁にも満たない小品です。書き出しは、「天保の頃、下總飯岡の石渡助五郎のところに座頭市という盲目の子分がいた」です。この小品を基に犬塚稔ら脚本家達がストーリーを膨らませていって、二十六作にも及ぶ映画「座頭市」が作られたわけです。「座頭市物語」の背景には、渡世人笛川繁蔵と飯岡助五郎の対立を描いた浪曲「天保水滸伝」(正岡容原作。昭和初期、二代玉川勝太郎の名調子「利根の川風たもとに入れて……」)によつて一世を風靡した)があるといふのも、平岡の本で知つたことでした。映画の第一作「座頭市物語」に天知茂演ずる浪人、平手作酒(ひらてみき)が登場し(彼は繁蔵の客分です)、最初は友人だったのが、最後は宿敵として、助五郎のところに草鞋を脱いでいた市と対決するものこれで得心できます。

## 子母澤寛の「座頭市物語」

この本の中にある「座頭市物語」はわずか十頁にも満たない小品です。書き出しは、「天保の頃、下總飯岡の石渡助五郎のところに座頭市」という盲目の子分がいた」です。この小品を基に犬塚稔ら脚本家達がストーリーを膨らませていって、二十六作にも及ぶ映画「座頭市」が作られたわけです。「座頭市物語」の背景には、渡世人笛川繁蔵と飯岡助五郎の対立を描いた浪曲「天保水滸伝」(正岡容原作。昭和初期、二代玉川勝太郎の名調子「利根の川風たもとに入れて……」)によつて一世を風靡した)があるといふのも、平岡の本で知つたことでした。映画の第一作「座頭市物語」に天知茂演ずる浪人、平手作酒(ひらてみき)が登場し(彼は繁蔵の客分です)、最初は友人だったのが、最後は宿敵として、助五郎のところに草鞋を脱いでいた市と対決するものこれで得心できます。

映画「座頭市物語」で市は、汚い策略によつて繁蔵一家を破り勝利の美酒に酔う助五郎に対して、このセリフを吐きます。得意の居合斬りで助五郎の前にすえられた酒樽を一刀両断。見えぬ目をクワツとひらきながら。

(註) 河内音頭とリズム・アンド・ブルースやソウルなどの黒人音楽との類似性は両者ともダンス・ミュージックであること、エイトビートを基本的なりズムとしていることなどいくつか挙げることができるが、最も本質的な共通点は、どちらもボーカル(音頭取り)の圧倒的な歌唱力の上に成立している音楽であるといふ点である。抜群の歌唱力を誇るボーカル(音頭取り)と、太鼓、三味線、ギターから構成されるリズム・セクションなどが橋の上で繰り広げるスリリングな掛け合いこそが、河内音頭の醍醐味に他ならない。

■プロフィール (うかい・まさのり) 一九五一年、福岡県に生まれる。現在、関西学研都市にあるBCC(新世代通信網実験協議会)で、広報担当者として、季刊誌「BBC」の編集等に従事。

# 私はその存在を肯定したい——立岩真也著『私的所有論』『弱くある自由へ』を読む

思想／福祉

『私的所有論』『弱くある自由へ』を読む 加藤正太郎

そんなこと言うなよ、それで全部じゃない、とすぐに言いたくなつて。そのくせ自分は

といえば結論をいつもためらい、Xとも言えるしYとも言える、それは難しい問題だと「ごも」といふ。拙速な断言をいましめているつもりで、運さを得意げにしてもいるだろう。

「思想」に依拠することなく書かれたという「私的所有論」(勁草書房)は、ある簡潔な等式の存在を浮かび上がらせている。そして誤解をおそれずに言えばこの等式は、私たちのもつ「単純」な「感覚」が、成立させているものなのである。感覚は論理を備えている」と書く著者は、この現実をめぐる様々な核心に、それなりに「単純なもの」があるはずだと言い、それを「論理を辿ること」によつて見出すのだといふ。だとしたらここで「論理」と呼ばれているものもまた「部分は全体より小さい」「Pかつ非Pは矛盾」といった)私たちがすでに身につけているものであるだろう。

『私的所有論』の主題は、こうした作業を行うことによって、「能力主義」や「優生學」をめぐる間に、具体的で規範的な答えを出すことに向けられている。導かれる結論は、例えは(1)能力を高めることはよいことであるが、能用に際しては能力以外のものを判断することは禁止される。(2)十分な分配だけをする(非介入的な)冷たい福利国家を構想する。(3)ある時期までの妊娠中絶は認められるが、出生前診断による情報の請求は制限されるべきである、といったものになるだろう。

一つの感覚を手放さず、身近な論理踏み外さずにおくことで、誰もが同じ道を辿るのかもしれない。けれども私たちにそれができないとしたら、いつたい何が邪魔しているのか。

同じ労働力商品としての価値を持つのであれば、民族・性別等によって雇用を拒否すべきではないとされる。……十分に遵守されてゐるとは言えないにしても、ともかくこの原則はある。……なぜ「能力」の場合は認めるのに、「民族」「性別」によつては差別しては

ならないのか。單行 (第8章、「私的所有論」)

ることになるだろう。

例えば私たちは、「能力」が不平等へとつながることに抵抗を感じながらも(そして「能力」のない人の存在を知りながらも)「能力」だけを評価すべきだと考え、またこの原則を「属性」による差別を身分制の温存だと批判しつつ「近代社会」の要請・要件とも捉えているだろう。しかし能力主義をめぐるこの「貫しない「感覚」は、著者の言う「はつきり認識されて」はいない「自明のこと」から、問い合わせができるのである。つまりこの「見「近代的な」原則は、近代社会の原理とされる「自由な契約」からは帰結しないのであり(契約が自由なら容貌や人種を理由にしてもよい)、逆にそれを制約するものとして働いているのだと。では、このような制約はどこから来るのだろうか。

できない。だから施設によつては解

能力主義批判の文脈で「もつ」価値に「あれる」価値が対置されることがあるが、……「できる」ことも「もつ」ことも否定する必要はない。……だがAが「できる」「できな」がAが「もつ」「もたない」ことに繋がること、それがAが「ある」ことを脅かすことを否定する。Aが「ある」ためにはAが「もつ」ことが必要であり、そのためには「できる」ことが必要だが、その「できる」人はAでなくてもよいのである。

（同章）

「能力」の由来をめぐる論争が、結局は曖昧な境界しか示しえず、規範的な回答に根拠を与えないのならば、「作るもの/作れないもの」という区分自体へと暗黙のうちに導いているものが、考えられるべき問い合わせ立ち現れることになるだろう。つまり、「自分の作ったもの(制御するもの)は自分のもの」という「私的所有」の「原則」である。

そして著者の述べるようになこの社会が、何もかもの始まりとして「私」を位置づけながら、と同時に「様々な因果のものに捉えられるものであり、「私のもの、私のものでないもの、というよくわからない境界線を動かしたり、」

そしてさらに(どう評価するかにあたつて)重要と思われる点は、この制約を正当化するとき用いられる常套的な区分「能力/属性」は主体によって「作られる/作られない」から選別の対象と「してもよい/してはいけない」という説明づけが、根拠をもちえないといふことである。なぜならこの区分は、その「能力」のどれだけを主体が作ったのかという反問に答えることができないのだから。

では「能力しか評価してはならない」のは何故か、この原則をどう評価するのか。著者は次のような回答を導いている。つまりこの「能力主義」による制約は、「他者が他者としてあること」を奪ってはならないといふ「感覚」によつて肯定されているのであり、一つの倫理、必要に關わる部分以外については他者を評価し選別してはならない」として擁護されなければならないのだと。そして、その実現は保証されではないのだから(市場はそうした傾向をもつとはいへ、強制力による禁止が求められることになるだろう)。

思えば、対立する利害の調整を「他者の尊重」と捉える私たちは、「福祉」の必要を誰もが認めるこの社会において、時にはその施策を逆差別として語り始めるのであり、さらには「福祉は雇用を生み出す」といった主張のもとにおいてさえ、「福祉」を「施し」と考えることを止めはしないのかもしれない。だとすれば、私たちが辿ろうとしてきた道筋もまた、問い合わせされることになるだろう。

## 本紙賛助会員募集

本紙は、京阪神地区の主要書店(一部東京)・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次Webに掲載しております。

本紙は、市民の表現を保障する媒体として、読者の方々の「投げ銭」及び「木戸銭」というバトロンシップによって、非営利的に発行しております。年会費100円は、読者の方々の「投げ銭」の目安です。

また、本紙を安定的に発行するために、賛助会員を募っております。年会費一口1000円(5号~8号までの定期購読料+送料+投げ銭)からの「木戸銭」を申し受けっております。

■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。  
■郵便振替:「るな工房」00920-9-114321

先に見た「能力/属性」の区分に戻れば、私たちは次のように問うこともできたのである。もし「能力」が生育歴や出身階層によって規定されているのだとしたら、「能力」による選別も差別ではないのかと。そして実際に真摯な論考や実践が取り組まれるその一方で、しかしこの問い合わせは、決着のつかない対立をもまた、導いてきたと言えるのではないだろうか。「ある程度は生得的である」(だから施設によつては解決しない、あるいは、だとしたらいつそう差別ではないか)、「その少くない部分は努力によつて身につけたものだ」(だから差別ではない)といった論点を交えた議論は、果てしなく続けられるしかないものであるだろう。へ生得因も環境因も主体に対して外的なものである点は同じではないか」と反問する著者は、「どうするべきか、どうすべきではないか」は「因果関係を拠点とする論理自体からは出でこない」(第7章)と書いている。

映画「座頭市」全作を縦横無尽に論じた快作ですが、この本によって映画「座頭市」の原作者が子母澤寛の「座頭市物語」であることを知りました。

これは子母澤寛の隨筆集『ふところ手帳』の中に収録されています。それで早速、古書店を廻り手に入れました。

『ふところ手帳』(子母澤寛、中央公論社)

この本の中にある「座頭市物語」はわずか十頁にも満たない小品です。書き出しは、「天保の頃、下總飯岡の石渡助五郎のところに座頭市」という盲目の子分がいた」です。この小品を基に犬塚稔ら脚本家達がストーリーを膨らませていって、二十六作にも及ぶ映画「座頭市」が作られたわけです。「座頭市物語」の背景には、渡世人笛川繁蔵と飯岡助五郎の対立を描いた浪曲「天保水滸伝」(正岡容原作。昭和初期、二代玉川勝太郎の名調子「利根の川風たもとに入れて……」)によつて一世を風靡した)があるといふのも、平岡の本で知つたことでした。映画の第一作「座頭市物語」に天知茂演ずる浪人、平手作酒(ひらてみき)が登場し(彼は繁蔵の客分です)、最初は友人だったのが、最後は宿敵として、助五郎のところに草鞋を脱いでいた市と対決するものこれで得心できます。

映画「座頭市物語」で市は、汚い策略によつて繁蔵一家を破り勝利の美酒に酔う助五郎に対して、このセリフを吐きます。得意の居合斬りで助五郎の前にすえられた酒樽を一刀両断。見えぬ目をクワツとひらきながら。

(註) 河内音頭とリズム・アンド・ブルースやソウルなどの黒人音楽との類似性は両者ともダンス・ミュージックであること、エイトビートを基本的なりズムとしていることなどいくつか挙げることができるが、最も本質的な共通点は、どちらもボーカル(音頭取り)の圧倒的な歌唱力の上に成立している音楽であるといふ点である。抜群の歌唱力を誇るボーカル(音頭取り)と、太鼓、三味線、ギターから構成されるリズム・セクションなどが橋の上で繰り広げるスリリングな掛け合いこそが、河内音頭の醍醐味に他ならない。

■プロフィール (うかい・まさのり) 一九五一年、福岡県に生まれる。現在、関西学研都市にあるBCC(新世代通信網実験協議会)で、広報担当者として、季刊誌「BBC」の編集等に従事。

あれば、先の議論の道筋は、次のように書き直されるべきなのかもしれない。

**私たち** そが「ある」価値 $\gamma_1$ と存在 $A$ から引き算するのであり $(A - \gamma_1) - a$ 、さらには「能力」の歴史を問い合わせながら、「環境」や「生得」による「作れない」ものの $\gamma_2$ をさらに差し引くことで $(A - \gamma_1) - a - \gamma_2$ 、努力する「意志」といったものへと切り詰めているのではないかと(ここで演算を止めるとき「意志」こそが人としての価値となるだろう)。そしてこうした演算の繰り返しにおいて $(A - \gamma_1 - \gamma_2 - \dots)$ 、「ある」こと $a$ は見失われているのではないだろうか。

人は「理性」や「快苦」を人であるための「資格」とするのかもしれない。しかし、(私達は、既にそのものが人であることを知っている)のであり、そしてへこから私達は引き算をする、……知つていたことを否定するのである(第5章)。

二つの引き算式の(一つの等式と連立方程式)、そのどちらを選ぶのか。著者の示す分岐点を、こう言いかえることができるだろう。  
私が制御できないもの、精確には私が制御しないものを、「他者」と言うとしよう。  
：私達はこのような意味での他者性を奪つてはならないと考えているのではないか。

(第4章)

「他者」という主題へと至る論述において、著者は「私的所有」の「原則」が「信念」にすぎないことを指摘し(第2章)、また「あるものを手段として扱う」ことへの「抵抗」を浮かび上がらせ(第3章)、その「抵抗」の核心が「私の」不可侵性ではなく、「私が」(制御)する」と自体にあるのではないかと述べている。

したがつてあるもの」とはまず、「私が触れようとしたもの」として読まれなければならぬだろう。そして、へ全てが自らに還つてくるように作られているこの社会の仕掛けを信用しない感覚があり、またへ私からそうした他者性を消去してしまうことへの警戒でもあるだろう。なぜなら私たちが「みんな」や「わかれあう」と言うとき、「本当にわかるということは違う」とか。それがわからないのだ

と「は違う」のだということを見失うのだから。

「PならばQ」が正しければ、「QでないならPでない」が正しい。(対偶の関係)。けれども時として私たちは、その逆や裏を「QならP」「PでないならQでない」を正しいとしてしまう。このことは例えば「能力のある者には生きる価値がある」と考える人が、「能力のない者には生きる価値がない」としてしまってこと何か関係があるのでないだろうか。この間違いを次のように指摘することはできるだろう。能力のある人の集合をPとし、生きる価値のある人の集合をQとするなら、PはQより小さいだけである(単なる部分集合)のだと。あるいはこの間違いは、人の存在をすら因果の列の中に捉える私たちの「感覚」が、「能力」を原因(始まり)とし、「生きる価値」を結果(終わり)とすることによつてもたらされているのだろうか。

**だとするなら**、 $a$ が $\beta$ のあり方を指示する、  
と著者が言うとき、社会の価値 $(A \parallel \beta)$ に対する抵抗から得られたはずの $a$ が、逆にいま「何もかもの始まり」として位置づけられたのだと考へるなら、これも因果に囚われた誤解であるのかもしれない。等式 $a \parallel A - \beta$  ( $A + \beta$ とする $a$ がある)は「公理」として「すでに」あつたのであり、「A +  $\beta$ ならば $a$ がある」という(正しい)命題が(わざわざ)証明されたのではなく、また社会(原因)から他者(結果)が導かれたのでもないだろう。そして「この価値も、すべての価値が結局のところそうであるように、それ以上根拠を辿ることができない」のであり、  
【公理】(態度)もまた、選択されるものである。

けれども、「制御しないことからくる快樂」とも語られるものが、この社会へと行き渡つていく光景を想像ときは人は、すでに見たくともの情景をもまた、思い浮かべ始めているのではないだろうか。恋人ならわかる。友人もわかる。いくら軽蔑していても人としては存在を認められる、こともわかるような気がする。(どんな経験でも与えてくれる)「経験機械」はつまらなものだとは思つ。そして同じ空の下に彼女がいることを想ひながら、と同時に、あの人、見知らぬ人、「思想・信条を取り下げさせること」を「認めないこと」を認めない人、そして制御できないままに制御してみたい障害の進行ゆえに歩けなくなつた彼を「努力分けがつかない」と言わされることが一番嬉しい

と語つた授産所職員の自慢げな顔。「たまにしか学校へ来ない奴(障害をもつ同僚)にそんな重要な仕事をさせるな」と書類を投げつけた元同僚。とあるドキュメンタリー映画の登場人物は街頭に出た障害者を指さし「これを片づける」と言い放つただという。

好きではないあるいは憎悪したり軽蔑しているけれども認めてしまうといった位相、水準があるだろうということである。……確かにそうであつたらよいとは思つてはいて、

そのように思うことの中に既に承認は訪れている。〔遠離・遭遇〕、「弱くある自由へ」

## るな工房/黒猫房/窓月書房



### 自費出版等のご案内

◎ご希望の造本で製作致します

るな工房/黒猫房/窓月書房では、  
自費出版(特装本・限定本も可)から  
商業出版まで、編集・製作・DTP・  
装幀・デザインなど出版全般のお手  
伝いを申します。お気軽にご相  
談ください。

■TEL/FAX:06-6320-6426  
■大阪市東淀川区菅原7-5-23-702  
■http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html

### ■編集後記

★このところ巷では倫理やカントが評判だ。そんな思潮に異和を感じる編集者は、知識人をそんなにも信頼してもよいのかと反問したい。身体や欲望は操作もされが抗もする。言葉も試し試される。すべてが関係的であるならば、態度変更は可能だとも言える。柄谷行人も立岩真也も、その点では同じことを言つてゐるのかもしれない。

★下版寸前までレイアウト変更に逐われ、いつもながらDTP担当の一人にはお話をになりっぱなしです。改めて深謝します。

■プロフィール(かとう・しょうたろう) 高校教員。